

# 選択本願念仏集解題

井 川 定 慶

## 一、序 言

本年正月の仏教大学始講式に際し『選択本願念仏集』の表題と「南無阿弥陀仏往生之業念仏為先」の標識とを伊藤真徹副学長先生が拝読され、私が其の解題をする光栄に浴した。嘗て浄土宗々学本校にあつても、そのまた昔の関東十八檀林に於ても、選択集の表題を拝読し、それのお話をされるのが定例となつてゐる由を、私が仏教専門学校在学当時、時の校長土川善激勸学から親しく承つたが、本学では依然、その古式伝統を厳守せられて、今日に到つてゐるわけである。

## 二、浄土開宗

偕て法然上人はまだ九歳の春、勢至丸時代に父漆時国が源内武者定明の不意なる夜襲に遇はれ、敢えない最期を遂げられるが、その御臨終の席に於て勢至丸は武士の子らしく父に仇討を誓つたところ、父はそれを遮えぎり、

「かくなることは前世の宿業と考え自分は恨みとはしない。恨みに報いるに恨みを以てせばそのあだ世々につきがたし。それよりも汝出家して、私の菩提を弔らひ、更に此の世にかかるいさかいや戦いのない平和な世の出現と、誰々までもみんな容易く救済せられる法門を見出して広く教えて安心を得せしめ解脱せられるようにしてほしい」と遺言せられるのであつた。

上人はその時まだ九歳の幼少ではあったが父の遺言を遵守し衆庶救済実現を決心され、父なきあと近くに比叡山より戻って来ている母の弟、新進の学僧觀覺得業の許で修学せられるが、十五歳の春、叔父に勧められて当時の仏教の根本道場たる比叡山に登り一人前の僧侶になることになった。

ところが最初の師たる持宝坊源光も次の師範学僧皇円阿闍梨も勢至丸の優れたる才能を認め感歎し「おぬしは将来天台の棟梁たるべし」言ひ換えればこの延暦寺の座主、比叡山学侶教養機関の長、今でいう仏教総合大学々長になられましようと言ひ推賞せられるのであった。

是れを聞いて上人は其れは困る。自分はそんな榮譽を求めてはいない。一般大衆の救済せられる極めて容易な法門を知りたい為めにここに来たのである。ここに長く居ては或は利用せられるかも知れぬ、遁れましようと言ひ、当時隱遁者の集まっている同じ比叡山の中の黒谷へ移り、慈眼房叡空上人の室に投ずるのである。叡空は慈覺大師より相承する大乘円頓菩薩戒の宗家を護持する持戒堅固な大徳であつた。

此の叡空に対し上人は「幼稚のむかしより成人のいまに至るまで父の遺言忘れがたくしてとこしなへに隱遁の心深き」よしを述べ給うのを聞き、『あなたは幼少にして出離の心を起せり、まことに是れ法然道理のひじりなり』と隨喜され早速「法然房」という房号と「源空」という実名とを授けられたのである。

十八歳の若き源空は父の遺言を実現せんが為め名利を捨て、ひたすら真面目に一向に仏教の真髓を探求することに精進せられた。

ところが一日円頓一実の戒体を師弟で談じあううちに師の慈眼房は「心をもて戒体となす」といひ、上人は「性無作の仮色なり」とこゝで立破再三、師は短氣を起し木枕をもて打たんとせられたので上人は席を立てて自らの部屋に戻られる。師も流石に学僧である。数刻思惟し遂に天台大師の著述を繙読せられるや、これはしたり源空の言う通りである。早速上人の部屋を訪れ「御房の申されるむねははや天台大師の本意、一実円戒の至極なり」と伝々相承の戒

疏や慈覺大師の廿五条の袈裟などを差出し爾後上人を軌範とし師が却て弟子の礼をとられることになったのである。

こうなると上人としては比叡山で教えを受ける師匠がなくなつたので、山を下り洛西嵯峨の釈迦尊像前に祈誓參籠せられたが夢のお告げを蒙らず、依て南都の諸大寺を歴訪して教えを受けんとせられたが、一言二言対談するうちに却て先方から教えを求められることになり、失望して奈良を後に醍醐寺に立ちより三論宗の先達寛雅を訪れると、此れも上人の学殖に感服し文櫃十余合をとり出し付属し称美讃歎をうけるのみであつた。

そこで上人はもとの黒谷に帰り、「今までは人に頼り過ぎた。これより以後は釈尊の説き遺された法門、即ち一切経を精読することによって教えを授けて頂こう」と決心され、報恩蔵今という仏教図書館に籠つて一切経五千余巻を五回も閲覽し研究を続けられるのであつた。

こうして仏教を研究して行かれるが、仏教多しといへども、結局は戒・定・慧の三学につきず、大乘にも小乗にも顕教にも密教に於ても、つまるところ戒定慧の三学によって得脱することになるが、戒をとつて見ても一戒をも満足に守れない。そうすれば自分も助からぬが世の多くの人々は恐らくは得脱できないことになる、どこか此の三学を修せずして助かる法門はありや無しや」という事になって更に研討せられているうちに恵心院の源信僧都の著述たる『往生要集』の中に唐の善導大師の觀經疏を引用して念仏往生の事が記されているのに目をつけられ善導大師の著書だけを更に三回熟読するに「一心専念弥陀名号行住坐臥不問時節久近念念名正定之業順彼仏願故」の妙偈にぶつかり「これだ」と決心、こゝに口称名号によって阿弥陀の極楽に往生出来るということを知り得たのである。これは戒定慧の三学の外なる法門であつて、而かも乱想の凡夫と雖も容易く行じ得られるし、それが弥陀の本願であり、釈迦出世の本懐、六方諸仏の証誠し給える法門であるというに至つて、欣喜雀躍せられるのであつた。

かくなる上は此の南無阿弥陀仏の口称名号の浄土宗を新しく別開し、みんなの方々へお伝へしよう。

ところで善導大師が此の世に在せば千里の波浪を嫌はずお尋ねして確かめたいが惜しい哉、既に五百年前に入滅せ

られてゐる、如何にせん／＼と思ひ悩み給ふところ承安五年三月十四日の夜のことであるが、夢定中に善導大師が上人の枕もとに御出現あつていろいろと御諭しがあつたのである、是れを夢定中の二祖（高祖善導、元祖法然）対面と稱してゐる。

ここに於て上人は「父の遺言耳底にとどまりて忘れ難かつた」衆庶の容易く救済せられる法門を見出し得たわけであらう。聊か父への追孝をも成就せられたことになる。

### 三、男女平等の教化

上人はかくなる上は一刻も早く衆庶に此の浄土の法門を伝え念仏往生をしてもらわねばならないと痛感せられ比叡の山を下り京洛に出られるが、最初に洛西粟生野に於て浄土教を説かれる事になつたが、地の利が悪く衆人の集り難いところから、夢定中に感得せられたあの善導大師と対面せられた土地を求めらる。即ち東山三十六峰の中央、華頂山の麓、吉水の地に居をかまえ庵を結んで念仏の法門を弘通せられることになつた。

その教化の方法として従来婦人に閉ざされていた仏法を男女平等にせられたのである。即ち婦人にも喚びかけ婦人にも説法せられたのである。従来仏教では「一切衆生悉有仏性」と原則論をとき乍ら實際は婦人を拒絶していた。高野山では女人堂から上へは婦人を入れないし、比叡山その他の諸山も同様であつた。上人はその旧習を打破せられたのである。かくて念仏の法門は忽ちにして京洛に弘まつて行くのである。

上人の対象は庶民であつたが、念仏の法門の噂は上層階級にまで伝つて行く。加ふるに上人は上述の如く円頓の宗家であつた関係もあり開宗と時を同じうして既に高倉帝は上人から授戒の作法をうけられてゐるし、後白河法皇、統いて後鳥羽上皇も円頓戒をおうけになつたし、時の権勢であつた関白九条兼実公も上人を召し月輪殿に於て円頓戒をうけていられる、その事は兼実の日記『玉葉』に委細記されてゐるところである、文治五年から建久、正治にかけて

十八回に及び

法然房来、授戒、其後念仏

或は

授戒次、始三恒例念仏一

というように記されている。

上人は授戒のために召されても恒例の念仏を必ず修して浄土の法門を伝えられていたことが知られる。

かくて建久八年上人病惱あつて召されても参殿せられなかつたので兼実公は深く心配せられ藤右衛門尉重経を使として

「浄土の法門年来教誡を承ると雖も心腑におさめ難し、念仏の要文をしるし給はりて、かつは面談になずらえ、かつは後の世の御かたみにもそなえ侍らむ」

との懇囑があつた。

上人は程なく平癒され、関白殿下の御申出が御尤であると痛感され、此の際著述をなして、後の世に伝えられるようにしようと、堅く決心され、予ねてから蒐集して居られた経文、釈義の抄写類を按配して、一本十六章段の著書にせられた。それが選択本願念仏集である。先づ九条兼実公へ献上せられる。此の製作年次について従来建久、建仁、元久など異説があるが（別に論文を既に公表している）浄土宗では、勅修御伝卷十一に拠つて、建久九年製作とせられている。

此の原本が現在京都市上京区寺町広小路の廬山寺に遺つて居て此の書物の外題は後水尾天皇の御宸翰を拝し、重要文化財指定となつている。

#### 四、表題と標識

さて『選択本願念仏集』と「南無阿弥陀仏 往生之業念仏為先」の十四文字は上人の真筆であつて本文は、安樂房と真觀房が仰せを蒙つて代筆している。

此の書物の内容は兼夷公の依頼に応ぜられて念仏の要文を集められたものであるが、単なる念仏集ではない。三祖記主禪師はその著『決疑鈔』巻一に相伝の説をあげて此の表題の中に三義あるも終に一意となると説かれている。その念仏は諸師所立の念仏ではない、阿弥陀如来の本願の念仏であつて、念仏には正行と雑行とあるが而かも正行中の助業と正定之業とを細別して正中の正なる口称の名号であり、それが善導大師のお立てになつた念仏、即ち、本願の念仏であるという。

更に上人は大阿弥陀経によつて始めて立てられたのが「選択本願」の念仏である。それはこゝにいう念仏は二百一十億の国土の中から選択し給える阿弥陀仏の本願の念仏である。そういう念仏について集めた書物が是れであるという事です。

次に此の選択本願念仏集について三段に分けて説明はするも、三義はこれ唯一義となる。即ち念仏は単なる念仏ではなく本願の念仏、本願の念仏とはまた選択本願の念仏というつまり一義に落ちつくというのである。その意味するところなか／＼深重である。

尚ほ選択であるが是れは選擇捨取を意味し、聖道門を選び捨て浄土門を択び取るという。つまり廢立の義が含まれている。それについては第一章「捨聖帰浄」に於て詳細に記されているが、これを読む聖道門の各宗から強く反駁をうけること必定なりと上人はよく御存知であつたから、此の書物を月輪殿下へ献上の節にも選択集の巻末に「高覽の後ちは壁底に納めて窓前にさらす勿れ」と記されているし、上人は御弟子の中でも、此れという心を許す者だけにし

か示されてはいないという警戒をされていたのである。

建久八年上洛して上人より親しく浄土の法門を承り後ちに浄土宗の二祖となられる鎮西の聖光房弁長、高弟の証空上人、隆寛律師、常隨の源智上人、そして親鸞聖人という四、五名に限られていた。

ところが上人の滅後建暦二年に上梓されて門弟達にも行き渡り、また外部にも漏れて知られるや早速比叡山から睨まれてその版木は持ち去られて叡山の大讲堂前で焼かれ版本は没取されたため現在一冊も遺ってはいない。若しあれば我が国の出版史上第三か第四番目の版行で珍重すべき文化遺産であつたらうにと惜しまれるのである。

尚ほ此の書物に書かれている戒定慧の三学の要らぬという主張は当時としては教界へ投げ与えた爆弾提議であつて、此れあることによつて念仏停止の詔勅を申請する原因の要素ともなるのである。

次に標識として 南無阿弥陀仏 往生之業念仏為先と書かれていることである。

かように題号と本文との間に標識語をおく例は他にもあつて、曇鸞大師の『讚阿弥陀仏偈』の初には矢張り、「南無阿弥陀仏」とあるし、『正法念経』には「帰命一切諸仏菩薩」と、その例は沢山ある、他の経文にあつては仏法僧の三宝を掲げている例が多い。仏教では仏法僧の三宝に帰依せねばならないといふので、一般に帰依の体である三宝を初めに出しているのであるが、ここでは三宝の中の仏宝をとりあげ「南無阿弥陀仏」とだけ書いてある。これは所詮、この書物の目的とするところは「南無阿弥陀仏」であるといふことを最初に明示せられたものである。

そして選択本願念仏集の念仏は口称の南無阿弥陀仏であつて「簡<sup>シテ</sup>異<sup>ニ</sup>観念<sup>ニ</sup>表<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>口称<sup>ト</sup>」<sup>ニ</sup>といふ口称名号である。

二祖鎮西国師が『徹選択集』にここの「南無阿弥陀仏」を「結前生後也」と申されている。題号の「選択本願念仏集」も、本文十六章段に説き示されるところもつまりはこの「南無阿弥陀仏」の口称名号六字であると解説せられている。

7 次に「往生之業念仏為先」。ここにいう「先」は前後を指すのではない。念仏を先きにして余行を後にするという

様に心得てはいけない。極楽往生の行業としては念仏が一番根本ちやという事です。ここにいう極楽とは我等が成仏のための学校です。そこに入って先輩に教えられて仏になるところなんです。「往生」という事も説明すれば長くなるが、此の娑婆の世界を捨て去って彼の仏の極楽世界に往くのちやということ。業は仕事とか所作と訳すればよろしい。

つまり往生する所作は念仏が本ちやという恵心僧都の『往生要集』の「念仏為本」の句を引用せられたものです。そこで『広本』では「念仏為本」とせられている。

選択集の形式の異つたもの、即ち古写本、古版本、木活本、活字本、縮写本そして大型小型というものは百余種に及び、一つの書物でかくも多種類なることは「世界第一」であると新村出博士は藤堂祐範師の『選択集大観』の序文に記されているところである。

次に選択集の内容の異なるものとして四本を挙げる事が出来る。

第一稿本、首章に浄土三部経の説時を論じているもの、

第二刪本、原稿を整理し浄書して月輪殿へ献上したので「略本」とも称せらる。此の内容は二祖鎮西上人へも元祖大師より伝えていられるし、三祖記主禪師の著述『選択伝弘決疑鈔』の底本ともなっていて、我が宗相伝の重要な本であるが、文中往々字句の刪略があるので、古来次の第三建曆本に依ることになっている。

第三正本、内容を更に漸次整備して建曆元年十一月平基親の序文を付し、翌年此を印行したもの、世に『建曆本』と称する現行本。

建曆二年の版本は版本も版行本も比叡山に没収せられて今はないが、弟子によって延応年間に再版せられて『延応版』がつくられた。これには序文がなかった。

元禄七年大谷派恵空のものに序文が付されているが短文である、ところが元禄九年義山上人が序文を付して版刻す

るが其の序文は長文で而かも華麗であるから後世に補作したと考えらる。

兵部卿平基親の名による序文がかように長短二通りあるが、鹿谷法然院所蔵の『延応版本』に短文の方が記され、滋賀県伊香立新知恩院所蔵の『永享版』本にも短文の序が記されている。土川勸学宗学興隆会から刊行された選択本願念仏集には此の二つの短文を照合して主体とし、義山本を参照したものを序文として掲出されているものである。

第四広本 門弟によって少し加筆増補したもので、初めの標識が「念仏為本」となっている。

偕てこの南無阿弥陀仏の六字は一般的に申せば標識を掲げたと解するが、我が浄土宗では此の選択集一部の精神と申すか主眼が此の口称の六字名号にあるという事を標示しているのだと伝えるのである。

念仏といえは仏を念ずる意だから南無釈迦牟尼仏、南無薬師如来、南無大日如来というのも念仏ではあるが、浄土宗の念仏は南無阿弥陀仏であると明示したものである。

さて浄土宗学では従来鎮西、西山、真宗の三派教学と称し、その中の鎮西派としては二祖鎮西上人の『末代念仏授手印』を主となし、これが後に五重相伝の形式となり其れの根本伝書とされ、安心起行作業相承となるが、それに対して元祖大師の『選択集』の方は宗学としては研究せられるが一般道俗の間にあつては聊か疎ぜられている感さえするのは遺憾である。但し名越派では選択集を初重としている。

石井教道博士の『選択集の研究』によると選択集の末疏を検討するに浄土宗よりも真宗に於て数多く選述せられていると述べられている。

浄土宗にあつて法然上人が根本であるからには其の代表的著述の『選択集』を今茲の浄土開宗の年を契機として授手印の原典である選択集に一段と力を注いで行くように心掛けるべきものと考えらる。

## 五、還愚の遺訓

次に元祖大師の御遺訓一枚起請文とのかかわりあいを考えたい。文中に「たとひ一代の法をよく／＼学すとも一文不知の愚鈍の身になして（乃至）知者の振舞ひをせずしてただ一向に念仏すべし」と記されている。学問も研究も往生の条件とはならないとつけとるべきである。

然し学問研究をしてはいけないと元祖は言はれていない。元祖も述懐されて

「習いあつめたる智慧は往生のためには要にもたつ可らず、されどならいたるかいにはかくの如く知りたるは計りなき事なり」

といはれている。廿四歳から浄土開宗迄の二十年間に一切経を五回も閲覽された甲斐があつてここに浄土開宗、口称往生の要文を見出し得たことは全く学問の功能であると自ら悦ばれ感謝せられている。

尚ほ上人の研究態度を拝すると

「われ聖教を見ざる日なし、木曾の冠者花洛乱入の時ただ一日聖教を見ざりき」（勅伝巻五）

と。これは寿永二年七月の木曾義仲の事件であつて、上人時に五十一歳の夏である。浄土開宗の後ち八年であつて尚ほも聖教を毎日閲読を続けられていたし、六十六歳の建久九年の春には『選択集』という立派な著書の選述をされた学僧である。学問研究を否定はしないが、学者ぶることを厳に誡められたことは確かである。

そして

「もし智恵をもて生死を離るべくは源空なんぞ聖道門をすて、此の浄土門におもむくべき」

と飽くまでも往生の爲めには智慧を求めずして唯だ口称名号だというお諭しであると拝するのである。

浄土宗の僧侶の中には過去には望月、椎尾、矢吹、荻原、渡辺また現在にあつても社会に向つて立派な学者が出ていられるが、それは研究上の学者であつて心の中のおちつき安心は凡僧と変りなく、口称名号によつて立派に往生の素懐を遂げようと心がけていられるのが現実である。

私の尊崇する知恩院第七十九世山下現有大僧正は昭和九年四月十一日の夕刻に百三歳の長寿で遷化せられたが、若き頃、明治三年三十八歳で増上寺法主に代つて山口県へ下り伝法を行つていられるし、東京に於ては当時の一流の学者と交友關係にあつた学僧であり、大本山百万辺知恩寺、東京芝増上寺へ転住、そして明治三十五年知恩院に晋董され浄土宗管長に補せられた大徳である。宗学の蘊奥を極められているに抱らず少しも学者らしい素振りを見せず「たとい一代の法をよくく学すとも一文不知の無知の輩に同じうしてただ一向に念仏すべし」と「往生之業念仏為先―南無阿弥陀仏」の御遺訓に徹せられていた、信者からお十念を懇望せられると「あなたの姿が阿弥陀さまとして拜ませて頂きます」とお十念をお授けになつたし、小僧さんにも〇〇さんと「さん」づけで呼ばれていた。無慾恬淡であつた例に泥棒に手許の金包みを風呂敷のまま与えて素知らぬ顔で通されていたが泥棒が警察署へ自首したことから新聞の特ダネとなつて増上寺事務所が初めて知り、それを尋ねられると「ソウでしたかナア」と平然とせられていた。また尾張生れでおうどんが好きであつたが、おダシ汁のないまゝ、手許の醤油をかけて食べ、あとで気づいた給仕が謝まつても「私はおうどんがすきですから結構でしたよ」とお答えになるし、寒中に風呂に入られた処、その湯が余りに熱くクラクラ煮えくりかえるので、そのまま湯に入られず冷たくなつた着物を召されて黙つて部屋に戻つて行かれた。これも小僧さんが見つけて分つたので、大僧正は何も言われないう、  
「老僧の怒つた顔を見たことがない」というのか門弟の総評であつた。

11  
かくて山下上人は四月十日の午後になつてまわりの方々に「長らくお世話になりましたが愈々明日は極の阿弥陀樂様のみ許へ還らせせて頂きます、ありがとう」と謝辞を述べられたが、主治医の目下博士は別に変つた容態を拝せな

いと語っていられたが、いよ／＼翌十一日午後から聊か異変を認め、午後六時知恩院重役、門弟達にとり囲まれ、称名の声も高らかなるうちに、「光明遍照の文」を称えられ、合掌してお十念を称え終られると其のまま大往生を遂げ西方浄土へ遷化せられて行ったのである。元祖大師の往生の場面そのままであった。

私も七十七歳の春を迎え、ここに本年始講に際して選まれて『選撰本願念仏集』の解明をさせて頂く光栄に浴したが、往生之業念仏為先——南無阿弥陀仏によって安然として往生を遂げたいと念願して擱筆する次第である。

(昭和四十九年一月十一日稿)